OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	くろじいとの約束、そして物語について
Author(s)	宮前, 良平
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 431-434
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68232
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

くろじいとの約束、そして物語について

宮前 良平
大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程

昨年、仙台で知り合った方から、毎年、海の日の前の日に寒風沢島という塩釜市の沖合にある小さな小さな島で合宿をしているから宮前くんもおいでよと言われた。離島に憧れのあった僕は、それを聞いて二つ返事で快諾した。その島には、一日に数便、塩釜港から連絡船が出ていて、昼過ぎにそれに乗って行くと、島にある唯一の船着き場の目の前に民宿があり、そこに一泊するのだが、そこの民宿の大黒柱が「くろじい」と呼ばれていて、日に焼けていて気さくで筋骨隆々で方言交じりで昔気質のおじいちゃんだった。

夜になり、美味しいお刺身をしこたま食べ、納屋から持ってきた追加のビールや日本酒も底をついてきたころ、くろじいが「よし、そろそろ行くか」と立ち上がった。僕たちは、こんな小さい島どこにも行くところなんてないぞ、そもそも夜で真っ暗だしと思いながらくろじいの後についていくと、くろじいは、モーターボートにさっそうと乗り込んでいた。僕たちは、まだかろうじて残っていた500ml缶のビールを民宿から持ってきて、ボートに乗った。くろじいは、ありえないくらいのスピードで小船を運転し、塩釜の沖合まで僕らを連れて行ってくれる。夜の海は、色彩がほとんどなく、ひたすらに無音だった。8時。突然大きな音がする。反射的に見上げると、大玉の花火が打ちあがっていた。夜の海は本当に真っ暗で、花火の光も音もさえぎるものが何もなくて、そして僕たちはほどよく酔っぱらっていて、とにもかくにも、その日の花火は綺麗だった。くろじいは、

花火に照らされた顔をこちらに向けるでもなく「こうやって海から見ると綺麗だろ」と不愛想に言っていた。僕は思わず、「来年もまた見に来ます」と言った。「そうか。じゃあ来いよ」とくろじいは顔色ひとつ変えずに返事をした。夜の海の上で、花火を見て、さらにおあつらえ向きにこんな約束をするなんて照れ臭かった。

南三陸という平成の大合併で生まれた人口1万人ほどの町は、津波のときに役場の職員たちが大勢亡くなったということで有名になってしまった。その日はちょうど年度末の会議が行われていて、役場の隣にある「防災庁舎」に避難した職員も多かった。津波は防災庁舎を飲み込み、アンテナによじ登った数名と、運良く何かにしがみつくことができた数名が生き残った。防災庁舎は、骨組みだけが残って、まるで放置されているかのように保存されている。

ほかの被災地と同じように、南三陸町も、将来の津波に備えるため、町内の平野部のほとんどすべてを、盛り土によってかさ上げした。その上に新設された商店街で、僕は地元の写真屋さんにインタビューをしていた。彼は、震災後の南三陸の様子や、地元の人々を写真で撮り続け、5冊の写真集を出版している。その中に、今はもう廃線になってしまった駅のホームの写真が収められていて、僕は、その写真に不思議と心打たれた。彼にその話をすると、「そういうふうな感想を言われるのは初めてだな」と少し驚きながらも、駅舎が開業したときの町民によるパレードの様子を教えてくれた。彼はその時、まだ子どもだった。そのパレードが行われた町の大通りは、今は、土の下に眠っていて、もう二度と目にすることはできない。

防災庁舎は、県の取り決めで取り壊すことができないので、その周りだけ、土盛りができずにいる。ほかの場所は土盛りが完了しているので、防災庁舎の周りだけ、異様に窪んだ形となる。あの日たくさんの人が避難した防災庁舎の屋上よりも高いところから、津波を知らない観光客は、それを見下ろすことになる。そして僕は、防災庁舎のさらに下、それが建っている地面のほうをじっと見る。津波の前の、

僕の知らないあのパレードのことを知っている地面は、もはやそこにしか残されていない。

僕が子どものころ、学校が終わって、グラウンドとかその辺の空き地とか、誰かの家とかでよく遊んでいた。僕の地元では、夕方になると市内のあちこちにあるスピーカーから、耳なじみのある童謡が流れてくる。それを合図にして僕らはそれぞれの家に帰る。でも、その日の僕は、なんだか帰りたくなかった。一緒に遊んでいるのが楽しいという理由だけではない。別れた後、明日もまたちゃんと会えるのか漠然とした不安を抱えていた。少しませていた少年の僕は、明日のことなんて誰も分からないじゃないか、今日の終わりが永遠の終わりになるかもしれないじゃないかと半ば純粋に思っていた。だから僕は、そういう得も言われぬ不安をやり過ごすために「さよなら」の代わりに「またあした」と言った。明日は無事にやってきて、明日もまた「またあした」と言って別れ、明後日もまた無事にやってくる。そんなことを繰り返して大人になっていった。

高橋源一郎の『さよならクリストファー・ロビン』という短編小説がある。この小説は、物語世界が舞台になっていて、例えば、浦島太郎とか、赤ずきんに出てくるオオカミとか、何の物語にも出てこない一般市民とかが登場する。そして、物語の世界の住民は、ある日、その世界が物語によってできていることを知ってしまう。あくる日から彼らは、一日の終わりに「次の日の物語」をつくることを日課とする。その物語が一晩明けて現実になることに気づいたからである。この世界が物語でできているなら、自分たちで物語を作ってしまえばいいやというわけであった。だから、自分のやりたいことを次の日の物語に書けば、それが実現するし、食べたいものもその通りに食べることができるようになった。それはそれは幸せなことだった。しかし、このことは同時に物語に書いていないことは消滅してしまうことを意味していた。大切なあの人をうっかり物語に書き忘れてしまっ

たら、その人は、もうその世界にいることはできなくなってしまう。
　だから、みんな必死に、自分の大切な人を生き延びさせるために、自分とその人が会う物語を作り続けるようになる。
　ぼくは、その小説における物語は、約束と一緒なんだとおもう。次の日も絶対に会おうという約束。約束を続けることによって、僕たちは存在し続けることができる。「またあした」と言うのを忘れたときはじめて、永遠の別れがやってくる。

　どうしてボランティアを続けているのと聞かれることがある。どうしてだろうと自分でもおもう。もはや、燃えたぎるような情熱も、社会に対する不満もそれほど無い。でも、不思議と、またあの人に会いたいなと思って、気づいたらボランティアを続けている。そうやって考えていくと、ボランティア先から帰るとき、決まって「またおいでね」と言われていることに気付く。僕は、その約束を守るためにボランティアを続けているのかもしれないとおもう。
　いや、少し違う。「またおいでね」ってまた言ってもらうためにボランティアに行っているのだろう。もしくは、「はい。また来ます」と応えるために、ボランティアに行っている。なんだかうまく言えないけど、そういうことなんだとおもう。
　寒風沢の海でくろじいと約束をしたから、ぼくはこうやってエッセイを書きながら、くろじいのことを思い出して、そういえば今年は花火見に行けなかったなと後悔している。でも、後悔をしているということは、まだそのことを忘れていないということだ。約束を守るということは、まるでToDoリストにチェックを入れるとそれが消去されてしまうように、その約束についての忘却を許可してしまうことのようにおもう。それはもう二度と思い返すことのない記憶になってしまう。
　だから僕は、今年出来なかった新たな約束を、来年くろじいとしようと思っている。あのときの花火は、写真には残っているからいいけど、あのあとの照れ臭さを、もう一度くろじいと味わいたいから。